研究班番号【 47 】

源氏物語における人物と和歌～和歌が形容する人物像～

国語班:木下　諒一郎、東田　更紗、森本　真奈佳

Abstract

The purpose of this study is to reveal the roles of “waka” for portraits. The experiment shows that we can read portraits of “Asagao No Kimi” and “Fujitsubo No Miya” from “waka”. This study concludes that expressions of ”waka” play the role of portraits.

要約

源氏物語には多くの人物が登場し、それぞれの特徴が多岐にわたる方法で書き分けられている。特に和歌は、作中で多く詠まれ、人物造形に大きな影響を与えていると考えられる。よって、和歌が人物造形に果たす役割を明らかにすることを研究の目的とした。作中の女性を2人取り上げ、それぞれの人物と和歌の特徴を調べた結果、各々の人物像が和歌から読み取れたため、和歌の表現が人物造形の役割を果たしていると結論づけた。

1.はじめに

源氏物語には多くの人物が登場し、それぞれの人物ごとに特徴がある。紫式部はそれらの特徴を実に多岐にわたる方法でかき分けているが、殊に和歌は、795首も作品の中に含まれており、人物造形に大きな影響を与えていると考えるのは必然だろう。私達は、源氏物語の和歌における表現方法について論じている高津高校LC国語班【15】(令和5年)の先行研究から、内容を一部引き継ぎ研究を行うことにした。また、夕顔と空蝉という源氏物語中の二人の女性の対称性を、和歌や地の文に見られる特徴から読み解いた宮本(2019)の研究から、詠者の和歌に共通する特徴が、詠者の人物造形を果たしているということがわかっている。このことから、本研究ではこれを藤壺の宮と槿の君という二人の女性に投影しても、同じような結果が得られるのではないかと仮説を立て、二人の女性が読んだ和歌に着目し、和歌が人物造形に果たす役割を明らかにすることを目的とする。

2.研究手法

二人の女性の和歌と人物の特徴を調べ、他の人物が詠んだ和歌と比較した結果から和歌が人物造形にどのような役割を果たしているのかを考察する。

≪調査1≫

和歌以外の本文から藤壺の宮と槿の君の二人について、それぞれの人物像を調査する。

≪調査2≫

二人の女性が詠んだ和歌に着目し、それぞれが詠んだ和歌が持つ特徴を明らかにする。

≪調査3≫

≪調査2≫で見られる表現などが、同時代の和歌ではどのような用法・心情で用いられているのかを論文やコーパスなどを用いて調査する。

3.結果

≪調査1≫

藤壺の宮は硬派な印象を受ける女性であり、性格は慎重で隙がなく、気丈であるが一方で、源氏との関係に迷いや戸惑いが見られる人物として描かれている。

(藤壺の宮は光源氏の父親(桐壺帝)の新しい妻であり、義母にあたる。)

槿の君は藤壺の宮と同じく芯が強い女性である。しかし、源氏との関係は落ち着いたもので、藤壺の宮と異なり光源氏の魅力に取り込まれることなく、源氏を“拒む”という意志を持ち続けた女性として

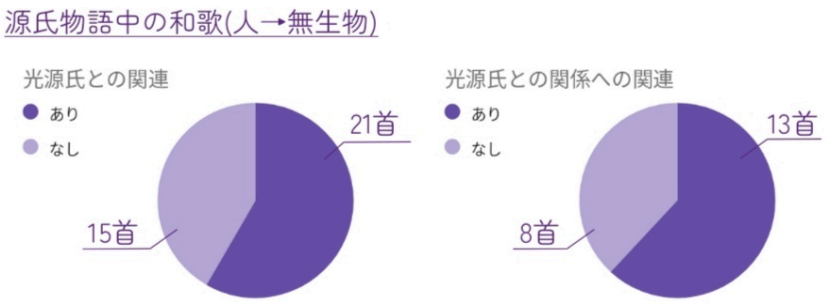
描かれている。
（槿の君は源氏のつれなさに大変苦しんでいるという女性の噂を聞き、自分は決して彼女たちの二の舞いにはならないと決心している。）

≪調査2≫
[藤壺の宮]
・ながらふる　ほどは憂けれど　行きめぐり　今日はその世に　逢ふ心地して
・おほかたの　憂きにつけては　厭へども　いつかこの世を　背き果つべき
・おほかたに　花の姿を　見ましかば　つゆも心の　おかれましやは　など
藤壺の宮は和歌中に憂しという単語（3首*／11首中）や、仮定表現（3首*／11首中）が複数見られるという特徴があった。そして、憂しという単語は世の中にかかるものと自分の身や置かれている状況にかかるものの2種類があり、仮定表現を含む和歌はネガティブで自分身にかかるものであることがわかった。（*…どちらの特徴にも含まれるものも含む）

[槿の君]
・花の香は　散りにし枝に　とまらねど　うつらむ袖に　浅くしまめや
・秋はてて　霧の籬に　むすぼほれ　あるかなきかに　うつるあさがほ
・そのかみや　いかがはありし　木綿欅　心にかけて　しのぶらむゆゑ　など
槿の君の和歌には、時間に関する表現がある和歌（4首／7首中）と、人を無生物に例えた和歌（3/7首中）が多くあるという特徴を発見した。

≪調査3≫
ここで、論文を用いた調査が困難だったため調査方法を変更した。藤壺の宮はコーパスを用いた和歌比較で調査を進め、槿の君は源氏物語中の女性の和歌との比較で特徴を探ることにした。
[藤壺の宮]
古今和歌集並びに拾遺和歌集に収録されている憂しという単語を含む和歌は全38歌、仮定表現を含む和歌は全13歌あった。
憂しという単語を含む和歌は、
1.世の中にかかるもの(*16/38)
2.自分自身や自分の置かれている状況にかかるもの(*11/38)
3.その他(*15/38)に分類することができた。(*…他の項目との被りを含む)
そして、それぞれについて分析した結果、更に細かく分類することができた。
1.は(a)自分が辛い世の中から逃げ出したい(b)世の中と何かを重ね合わせた和歌(c)その他の3つ。
2.は(d)何かに対して(e)感情として(f)わが身が、つらいの3つ。
3.は(g)動物を(h)秋を(i)その他を題材としたものの3つ。
また、仮定表現が含まれる和歌について、≪調査2≫から藤壺の宮の和歌で使われる仮定表現はネガティブなものや自身の置かれている状況にかかっていることがわかっている。
そのため、藤壺と同じように仮定表現が使われている和歌(6/13)を比較対象とした。そしてこれらの和歌は、想い人や恋人が関連したネガティブなものが多く、距離や時間について触れているものが多い印象を受けた。

[槿の君]
源氏物語中の女性の和歌の中で、時間に関する和歌(時間の流れを詠んだ歌、時間の流れを惜しんだ歌)は7首あり、そのうち4首が槿の君によって詠まれていた。
また、源氏物語中の女性が、人を無生物に例えて詠んだ和歌は36首あり、そのうち槿の君和歌は3首であった。36首のうち、（ｉ）源氏に関連のある内容の和歌は21首である。そのうちの半分以上である13首は、（ⅱ）源氏との関係に対する不安や非難、源氏の来訪に対する喜び、源氏との間の子に関することを詠んだ和歌である。一方、槿の君が人を無生物に例えて詠んだ3首はそれぞれ、源氏が最初の妻を亡くしたことをあわれむ和歌、源氏の娘である明石の姫君の入内の際に、明石の姫君への薫物とともに贈った和歌、自分は色褪せてしまったと源氏の好意を取り合わない意図の和歌である。



※上記の円グラフは、源氏物語の中で、女性が人を無生物に例えて詠んでいる和歌のうちの(ⅰ) の割合を、右の円グラフは、(ⅰ)のうちの(ⅱ)の割合を示している。

4.考察

［藤壺の宮］

憂しが含まれている藤壺の和歌は、≪調査3≫の分類から、1.世の中にかかる憂しと2.自分自身や自分の置かれている状況にかかる憂しに分類できる。

1.世の中にかかる憂しについて、藤壺は「子どものためにつらい世の中を本当に捨てることはできない」と詠んでいる。この時点で藤壺は出家をしていたので、実際には世捨て人となるため≪調査3≫での分類から、つらい世から逃げ出したいという意味である(a)は少し当てはまらないように思われるかもしれない。しかし、全体の文意を読み取れば今はまだ完全には世から離れることができておらず、本当は完全に世から離れたいという意が読み取れるため、大きくみれば(a)に該当するといえる。そして(a)の和歌はすべて、世を捨てたいと思いつつも、そこで生じる障壁との葛藤が同時に詠まれている。

このことから、どれだけ自分が辛くとも、こどもを守らなければならないという藤壺の葛藤と、芯のつよさが表現されているのではないかと考えられる。

2.自分自身や自分の置かれている状況にかかる憂しについて、藤壺の和歌はわが身を憂いているので(f)に分類される。(f)は全体的に、俯瞰的な視点で歌が詠まれている。

このことから、藤壺は自身の状況を客観的な視点で見ることのできる、冷静さを持つ人物だったと考えることができる。

≪調査2≫，≪調査3≫から、藤壺の宮の和歌で使われる仮定表現は、ネガティブなものや自身の置かれている状況にかかっているということと、藤壺と同じように仮定表現が使われている和歌には、想い人や恋人が関連したネガティブなものが多く、距離や時間について触れているものが多いということがわかっている。

このことから、仮定表現を用いることで、藤壺の宮の迷いがみえる光源氏との関係に距離（壁）をつくりだしているのではないかと考えられる。

また、仮定表現の和歌をポジティブなもの、ネガティブなもので分類すると、圧倒的にネガティブなものが多く、藤壺の仮定表現を用いた和歌がネガティブなことや送り主がすべて光源氏であることからも、彼女が光源氏との関係に否定的な気持ちを持っていたことが読み取れる。

［槿の君］

時間に関する和歌を多用していることから、槿の君は時が進んでいくことやその一瞬、つまり時間の有限性を意識していたと考えることができる。

このことから、彼女は光源氏からの恋心を有限なものだと考えており、その一時性やその先を意識していたと考えられるのではないだろうか。これは、槿の君が持つ源氏の恋愛観に対する認識(多くの女性と関係を持つがあまり、一時愛していたとしても新しい女性ができればその愛は薄れていく)と類似していると捉えることができる。

また、≪調査3≫から、人を無生物に例えた物語中の和歌の半分以上が、源氏との関係について詠んだものであるのに対して、槿の君が人を無生物に例えて源氏との関係について詠んだ和歌は一つもないことがわかった。この違いが、他の多くの女性とは異なった、源氏を拒み続ける槿の君の人物像を表出させていると考えられるだろう。

5.結論

私達は和歌が人物造形に果たす役割を明らかにすることを目的として、藤壺の宮と槿の君の二人を挙げ、人物と和歌の特徴を調査し同時代の和歌との比較を行った。その結果、二人の女性のそれぞれに、特有の和歌の特徴を見つけることができた。また、考察より、これらの特徴は詠者それぞれの人物像を表していると言える。したがって、仮説は立証された。また、和歌は、詠者の人物像を、その表現や技法に形を変えて、歌の中に反映することで、物語において人物造形を担うという役割を持つと結論付けた。

本研究の課題点としては、和歌を分類する際にも、客観的な根拠として参考文献を用いる必要があることが挙げられた。また、今後の展望として、本研究で二人とした研究対象の人数を増やすことで、より多様な観点から和歌の役割を探ることができると考える。さらに、本研究において用いた調査方法や考察は、他の人物や物語への応用も可能だと考えられる。

6.参考文献ならびに参考Webページ

柳井滋 [ほか] 校注／竹昭広、大曾根章介、久保田淳、中野三敏,「源氏物語」,岩波書店,1999,[新日本古典文学大系]

小島憲之、新井栄蔵校注／佐竹昭広、大曽根章介、久保田淳、中野三敏編集委員,「古今和歌集」,岩波書店,1989,[新日本古典文学大系5]

小町谷照彦校注／佐竹昭広、大曽根章介、久保田淳、中野三敏編集委員,「拾遺和歌集」,岩波書店,1990,[新日本古典文学大系7]

宮本紗依(2019)「『源氏物語』における人物と和歌　―帚木三帖における夕顔と空蝉の対照性により―」/横浜国立大学国語・日本語教育学会/巻 37, p. 32-46 /発行日 2019-03-20

高津高校LC国語班【15】(令和5年)「紫式部の表現力の豊かさ～『源氏物語』における3人の女性の和歌比較から～」/大阪府立高津高校LCⅢ研究論文

山上義実(2013)「『源氏物語』朝顔姫君及び朝顔の巻を巡って」/金城学院大学論集. 人文科学編/巻9号, p. 159-166/発行年 2012

今西明日香(2011)「『源氏物語』朝顔論」/奈良大学大学院研究年報/第12号,p. 255-258/発行日 2007-03-01

中納言コーパス
https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search (2025.12.28)

古典和歌Stream
https://wakastream.jp(2025.12.28)

Miloud Club〈古今和歌集の部屋〉
http://www.milord-club.com/Kokin/index.htm(2025.12.28)

古典の改め
https://classicstudies.jimdofree.com/%E6%BA%90%E6%B0%8F%E7%89%A9%E8%AA%9E/%E5%92%8C%E6%AD%8C%E4%B8%80%E8%A6%A7/(2025.12.28)

1万年堂出版(藤壺と朝顔の姫君に関するもの)
https://www.10000nen.com/?s=%E6%BA%90%E6%B0%8F%E7%89%A9%E8%AA%9E(2025.12.28)